



どじょう寿司を味わう会

from 新栄小学校

十二月十九日(火)、三年生の児童を対象に、『どじょう寿司を味わう会』を開きました。子どもたちの多くは、どじょうを見たことも、どじょう寿司を食べたこともない様子で、大変貴重な体験となりました。

服部町長から、「いただきますは、命をいただくということなのですよ」と教えていただいた後、『まちおこしの会』のみなさんから説明を聞きました。子どもたちは、昔の自然やくらしの話を興味深そうに聞いていました。

さあ、いよいよどじょう寿司作り体験です。生きたどじょうを見せてもらい、雌雄の違いを教えていただきました。雌雄の見分けはなかなかつかない様子でしたが、桶をのぞき込んだり、触ってみたりと十分観察することができました。その後、どじょうを煮ます。生きのいいどじょうですから、子どもたちが鍋に入ると、どじょうが跳ねて煮汁が飛び散ることもありました。

次に、酢飯を作ります。炊き立てのご飯に、合わせ酢を混ぜます。「切るように混ぜるのよ」と教えていただきながら、ご飯を冷ますために、子どもたちは一生懸命うちわでおきました。

ここで、ハラソという大きな葉っぱを見せていただきました。この葉には殺菌作用があり、料理の仕切りなどに使われています。今日は、押しずしの箱に敷い

て使います。ハラソを敷いたら、酢飯を丁寧に敷き詰めます。子どもたちは、酢をつけた手でそおつとご飯を押し広げていきました。「手に付いたご飯は食べていいよ」と声をかけられ、ちよつとうれしそうにべろりと食べる微笑ましい姿もありました。

最後に、酢飯の上にとじょうをきれいに並べて蓋をし、しっかりと押さえつければ完成です。給食と一緒に、みんなでいただきました。「おいしい」という声があちらこちらから聞こえてきました。お腹も心も大満足の一日でした。『まちおこしの会』の皆様には、前日から準備していただき、本当にありがとうございました。今後も、豊山町の伝統を子どもたちに伝える活動を大切にしていきたいと思



私の航空史

岡野允俊

名古屋空港

名古屋空港は戦後日本航空機工業の晴れ舞台となっていた。

昭和四十六年には日本航空宇宙ショーが開かれ、ブルーエンジンエルの迫力のある妙技など、一大ページェントに興奮を覚えたものである。今も自衛隊基地祭では大勢のファンによって人気を博している。

負の記憶もあった。昭和三十五年に全日空機(DC-3)の後部に自衛隊機(F-八六D)が追突したり、平成六年には中華航空機が着陸に失敗し大惨事が起きた。しかし、イラクへの人道的支援をはじめインド洋津波への人的、物的支援等海外支援の基地として国際貢献に尽くし脚光を浴びた。ダークグレー

やブルースカイのC-130が飛行していたのも記憶に新しい。さらに民間航空の方はどんどん発展し、国内線、国際線ビルも充実され、名古屋空港は国内有数の国際空港として発展していった。

そして平成十七年二月には常滑沖にかねて建設中だった「中部国際空港」が完成。その舞台を移すことになった。こうして西側の民間航空側は歴史を塗り替えてしまう。東側はそのまま国の治安に対処することとなった。六十余年にわたる歴史を築き上げてきた名古屋空港は、その後、愛知県営名古屋空港として小型旅客機(コミュータ航空)やビジネス機などで地方都市と結び活動していくことになった。慣れ親しんだ名古屋空港もこれらの都市と結び、うまく育てていけば立派な地方空港としてさらなる成長をしていくことであろう。

特集

町政あんない

情報コーナー

まなびすと

キラリ健康ナビ

わいわいプラザ